

研究論文

介護実習Ⅰのルーブリック評価の検証

—3つの介護実習を通したルーブリックを目指して—

鷲尾 敦 福田 洋子 野呂 健一 寶來 敬章

1. はじめに

本研究は、本学キャリア育成学科介護福祉コースで実施された介護実習Ⅰ（2019年8月19日から8月30日）において実施したルーブリック評価に関して検討することを目的としている。これまで、本稿の執筆者で構成されている高等教育研究会で、実習におけるルーブリックの作成及びルーブリック評価の導入を進めてきた。平成29年度は、アンケート調査をし施設の指導者のからの意見を整理した（福田他、2018）。介護実習ⅡやⅢでのルーブリックの開発や導入に関しては、既存の評価を用いることの弊害や不明確さなどが指摘されると同時に、作成したルーブリックについても曖昧な表現や評価できない（しにくい、妥当ではない）などの問題点が指摘された。施設職員や実習生を評価する立場にいる施設の実習指導者たちと協働しながらルーブリックを作成することの困難さは数多くあるものの、実習評価においてルーブリック評価を導入することそのものについては、概ね肯定的な意見も多かった。平成30年度は、ルーブリック評価を介護実習Ⅲ（2018年8月31日から9月30日）において正規の評価票として使用し、実習指導者と学生の評価の違い等について検討した（福田他、2019）。介護実習Ⅲでのルーブリック評価の導入について、実習評価者からは「評価しやすくなった」などといった良好な意見が散見された。ただ、留学生と日本人学生の評価に同じルーブリックを使用することの難しさ、特定の項目の曖昧さなども指摘され、今後の対応及びルーブリックの内容を修正・再検討する必要性が指摘された。実習生である学生の認識もルーブリック評価については肯定的な意見が多く、実習先での評価にも納得できている傾向が高かった。ルーブリックの内容が学生と実習先で共有されていることで、自分の達成すべき目標の具体的な度合いや、現時点での課題などは理解しやすくなっていたと考えられる。また、ルーブリックの記載内容についても実習指導者へインタビュー調査を行い、加筆修正を繰り返しながら進めた。そして、介護実習Ⅱ（2019年2月10日～3月9日）についても同様のルーブリック評価を行い、分析を行ったところである（鷲尾他、2020）。

専門職養成の実習に関して、看護や保育、介護の分野での実習にルーブリックを導入した研究は散見できる（終崎他2018、三木2018、宮本他2017、岡山他2014など）。これらの研究では、作成したルーブリックを用いた評価や実習指導者と共にルーブリックの検討を試みている。そのなかでも宮本他（2017）は、初学習段階における介護実習でのルーブリック評価という点においては本研究とも類似性が高い。この研究では主に実習生が不安だと感じる傾向が高い「実習記録（日々の記録）」に着目して検

討している。ルーブリックの評価の観点・尺度の修正等を繰り返しながら、他者に伝わりやすい文章表現や記録として含むべき内容、望ましい体裁等をルーブリックに明示している。このルーブリックの作成と検討を通して、学生と教員が共有し今後の指導や学習の可能性、ひいては異なる学年での実習への活用も大きく期待できるものであると考えられる。

本研究で主に検討する介護実習Ⅰは1年生が対象となっており、当該学生にとっては初めての介護実習となる。初めての实習ということもあり、介護実習Ⅰは、介護実習ⅡやⅢと比べると、実習の目的や実習生に求められる内容も大きく異なることが予想されたので、若干の変更を加えた。ただし、介護実習Ⅰでは評価しないものの、介護実習ⅡやⅢでは評価する内容については、該当の項目を削除するのではなく、斜線で評価対象外と示すことで、学生に「後の実習でこれらの項目も評価される」ということがわかるよう配慮した。

このような経緯を経て作成し実施した介護実習Ⅰのルーブリック評価に関して、本研究では実習担当者の実習反省会での意見及びルーブリック評価データの分析から検討する。そしてこれらの作業を通して、介護実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを貫徹するルーブリックの作成を目指すとともに、介護福祉士としてどのような資質能力が卒業まで必要とされるのか、可視化された具体的な目標を提示できるようなルーブリックの完成を目指している。

2. 実習Ⅰにおけるルーブリック評価

2.1 実習Ⅰの特徴

実践的な学問である「介護」において、介護実習は重要な位置づけにある。学生にとって介護実習は、介護施設で実際に行われている介護体験を通して、学んだ基礎知識や基礎技術を深めていく機会である。

厚生労働省が示す「社会福祉士学校及び介護福祉士学校の設置及び運営に係る指針について」において、実習Ⅰは、「利用者の生活の場である多様な介護現場において、個々の利用者の生活リズムや個性を理解した上で個別ケアを理解し、利用者及び家族との関わりを通じたコミュニケーションの実践、介護技術の確認、多職種協働や関係機関との連携を通じたチームの一員としての介護福祉士の役割について理解することに重点を置いた内容」、実習Ⅱは、「一の施設・事業等において一定期間以上継続して実習を行う中で、利用者の課題を明確にするための利用者ごとの介護計画の作成、実施、実施後の評価やこれを踏まえた計画の修正といった介護過程を展開し、他の科目で学習した知識及び技術等を統合して、具体的な介護サービスの提供の基本となる実践力を習得することに重点を置いた内容」と位置付けられている。

高田短期大学の介護福祉コースでは、2年間の学びの中で、3回の実習科目を設定している。1回目は介護実習Ⅰ（厚労省の実習Ⅰの位置づけ）、2回目は介護実習Ⅱ（厚労省の実習Ⅱの位置づけ）、3回目が介護実習Ⅲ（厚労省の実習Ⅲの位置づけ）である。介護実習Ⅰは1年生の前期（8月）に10日間、デイサービス、グループホーム、小規模多機能型居宅介護、養護老人ホーム、ケアハウス等で実施する。介護実習Ⅱは、1年生の後期（2月～3月）に20日間、介護実習Ⅲは2年生の前期（9月）に20日間、特別養護老人ホーム、介護老人保健施設、障害者支援施設で実施している。

介護実習Ⅰの施設であるデイサービスやケアハウスを利用している高齢者は、比較的元気で、日常生活動作については、自分で概ねできる人が多いところが特徴である。グループホームや小規模多機能型居宅介護では、認知症のある高齢者が入居しているが、9人～10人と少人数で、自分でできるだけ自分ですることが求められている介護現場である。ゆえに、初めて実習に行った学生はコミュニケーションや見守り介護に多くの時間を費やすことになる。

2.2 実習Ⅰのルーブリック

高等教育研究会は、平成30(2018)年、これまでの実習評価票をルーブリックへ変更し、介護実習Ⅱ、介護実習Ⅲで実際に使用し、その後、それぞれの施設にアンケート調査や聞き取り調査を行いルーブリックの内容を精査してきた。今回は、令和元年度の学生の介護実習Ⅰで、実習Ⅰとして初めてルーブリック評価を採用した。

これまで、介護実習ⅡとⅢは、実習施設種別が同じことから、同じ内容のルーブリックを使用していた。しかし介護実習Ⅰは、対象施設や実習目標が異なっていることから、評価項目の介護計画や受け持ち利用者に関わる内容など介護実習Ⅰで評価しない指標があった。しかしそれらを削除せずに斜線を引き、次の実習以降で達成すべき目標が見えるようにした。さらに評価項目の再検討を行い、介護実習Ⅰの初学段階で達成すべき目標として新たな評価指標を追加した。追加した評価指標は、次の13指標である。

①「実習態度」領域では「積極性」の「利用者や職員の名前を覚える」、②「協調性」の「自然な笑顔、挨拶をする」、③「守秘義務」の「必要時には、カーテンをするなど、プライバシーに配慮できる」、④「礼儀」の「自己の所在を常に明らかにし、実習場所を離れる時は、職員の承諾を得る」、⑤「コミュニケーション」領域では「利用者とのコミュニケーションは円滑である」、⑥～⑨「介護活動」領域では「受持ち利用者理解」の「利用者の1日の生活を理解する」「利用者の年齢、性別、障害の種別・程度などから利用者の特徴を理解している」「利用者の生活歴や家族状況、人間関係など理解できる」「利用者のADL(日常生活動作)など生活能力や作業能力を理解している」、⑩～⑫「生活支援技術」の「利用者の安全で快適な生活環境を整える必要性が理解でき、実施できる」「指導者の指導のもとで介護技術を安全・安楽に実施できる」「レク

実習Ⅰ	評価項目	評価指標(目標)	まだまだできていない1点	努力中3点	ほぼ達成5点	評価点	コメント欄
介護活動	受け持ち利用者理解	利用者の1日の生活を理解する	利用者の1日の生活を理解しておらず知らず知らない	利用者の1日の生活を理解しようとしている	利用者の1日の生活を理解している	—点	評価の着眼点ごとにコメントを記載
		利用者の年齢、性別、障害の種別・程度などから利用者の特徴を理解している	利用者の年齢、性別、障害の種別・程度などから利用者の特徴を理解しようとしている	利用者の年齢、性別、障害の種別・程度などから利用者の特徴を理解している	—点		
		利用者の生活歴や家族状況、人間関係など理解できる	利用者の生活歴や家族状況、人間関係など理解しようとしている	利用者の生活歴や家族状況、人間関係など理解している	—点		
	利用者の安全で快適な生活環境を整える	利用者のADL(日常生活動作)や作業能力を理解している	利用者のADL(日常生活動作)や作業能力を理解しようとしている	利用者のADL(日常生活動作)や作業能力を理解している	—点		
		受け持ち利用者の1日の生活を把握している	受け持ち利用者の1日の生活を把握しようとしている	受け持ち利用者の1日の生活を把握している	—点		
		利用者の障害や疾病を把握して、利用者の望みが理解できる	利用者の障害や疾病を把握しようとしている	利用者の障害や疾病を把握して、利用者の望みが理解できる	—点		
	生活支援技術	利用者がどのような気持ちで生活しているかを察知できている	利用者がどのような気持ちで生活しているかを察知しようとしている	利用者がどのような気持ちで生活しているかを察知している	—点		
		受け持ち利用者の人間関係を把握している	受け持ち利用者の人間関係を把握しようとしている	受け持ち利用者の人間関係を把握している	—点		
		受け持ち利用者の状況やニーズを把握している	受け持ち利用者の状況やニーズを把握しようとしている	受け持ち利用者の状況やニーズを把握している	—点		

図1 実習Ⅰのルーブリックの構成

⑥～⑨「介護活動」領域では「受持ち利用者理解」の「利用者の1日の生活を理解する」「利用者の年齢、性別、障害の種別・程度などから利用者の特徴を理解している」「利用者の生活歴や家族状況、人間関係など理解できる」「利用者のADL(日常生活動作)など生活能力や作業能力を理解している」、⑩～⑫「生活支援技術」の「利用者の安全で快適な生活環境を整える必要性が理解でき、実施できる」「指導者の指導のもとで介護技術を安全・安楽に実施できる」「レク

リエーション企画を立て、実施できる」、⑬「施設理解」領域では「職種の理解」の「介護福祉士の役割や他の職種の役割が理解できる」。他に、介護実習ⅡやⅢの評価実施後の検証結果から改善すべき記述語を修正した。例えば、「施設理解」の評価内容が指摘されていたため、「施設が地域で果たす役割や機能を理解している」を「施設が地域で果たす役割や機能を実習日誌や訪問前記録に詳しく表現できているか」とし、実習指導者から説明された内容を理解し日誌等の記録に記載したかが観察できるように表現を変えた。さらに「介護活動」領域での「受持ち利用者理解」の項目において、「利用者の望む生活が理解できるか」を「利用者の障害や疾病を把握して、利用者の望みが理解できる」「利用者がどのような気持ちで生活しているか知った上で介護関わっている」の2項目にした。

2. 3 評価活動の方法

令和元年8月に実施した介護実習Ⅰは、1年生32名(日本人13名、留学生19名)が対象で、期間は、2019年8月19日から8月30日の内の10日間である。実習施設は、デイサービス6施設、グループホーム4施設、ケアハウス2施設、養護老人ホーム1施設にそれぞれ分かれて実施した。実習終了後は、9月2日学内で、同じ様式のルーブリックを用いて学生が自己評価を行った。その後、実習施設に実習記録等必要書類とともに送付した。留学生はルビ付きのルーブリックを用いた。実習指導者は、学生が自己評価したルーブリックや実習記録等を閲覧し、学生の評価を同じ様式のルーブリックで行った。

先に送付したのは、三重県介護福祉士養成施設協議会の各学校は、以前から学生の自己評価を実習指導者へ提出しているからである。また、実習指導者講習会でも自己評価を見てから評価するように実習指導者に依頼している。それは、①指導者が、学生自身の努力の自覚と指導者の学生に対する印象の違いを把握するためであり、②学生への指導が学生を職員の一員としてみるのではなく、実習生としてみることができていたかを指導者が確認するためである。

一方で、自己評価結果によって指導者の評価がぶれる可能性も考えられることから、実習指導者に見せない方が良いとの高等研究会での指摘もあり、次回の実習評価において検討する予定である。

3. 介護実習Ⅰのルーブリック評価の分析

3. 1 学生の自己評価力

(1) 各学生の評価平均値の状況

介護実習Ⅰで使用したルーブリックの各指標に3つの基準を用意しており、目標レベルから5点、3点、1点と点数化している。介護実習Ⅰの各学生の自己評価と施設指導者による評価における各評価指標の単純平均(つまり各学生の評価平均値)を日本人学生、留学生ごとに平均したものが表1である。これによ

表1 実習Ⅰの学生評価の総平均

	施設指導者評価	自己評価
日本人学生	3.83	3.89
留学生	4.00	3.87
全体	3.93	3.88

れば、今回の実習では、学生の自己評価は日本人学生と留学生はほぼ変わらず、施設指導者による評価は留学生の方が若干高くなった。これまでの調査(実習Ⅲ2018.9、実習Ⅱ2019.2-3)とは、対象学生、

対象実習が異なっているので単純に比較はできないが、2回ともに留学生の自己評価が大変高い傾向にあったので、今回はその点が大きく異なる結果となった。

その状況は、評価点の分布にも表れている。図2、3を見ると留学生と日本人学生の評価平均値は、自己評価も施設指導者による評価も全体に広がり、留学生だけが特別に自己評価が高いあるいは施設実習指導者による評価が低いという様子はない。ただ、非常に高い自己評価の留学生が少ないながらも2名いる一方で、以前はいなかった特に低い評価をする留学生が4名存在している。留学生が多く入学するようになって、留学生の状況も変化してきていると思われる。また、初年次の前期の段階では、日本語能力がまだまだ低く、それに伴って学んだ知識や技術、実習場面での日本語でのコミュニケーションに

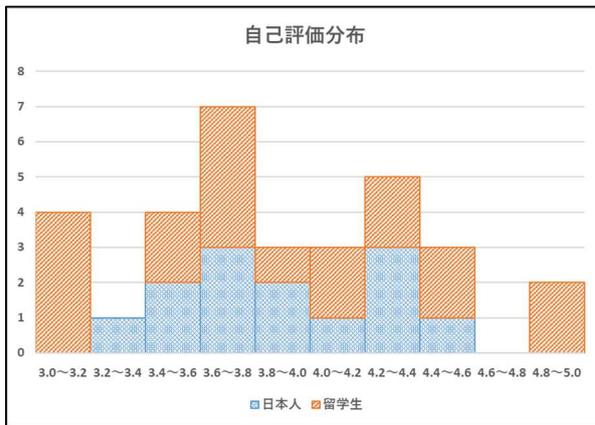


図2 学生自己評価の評価平均値の分布

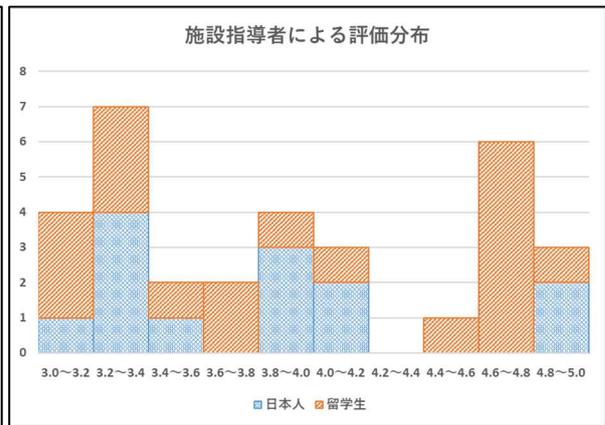


図3 実習指導者による評価平均値の分布

自信がない留学生が、介護実習 I の評価において自己評価を低くしたということが推測される。

(2) 施設指導者による評価と学生自己評価との相関

施設指導者による評価と自己評価に相関があれば、その学生にある程度の評価力があると考えている。学生の自己評価の指標ごとの得点と、その学生を評価した施設指導者の評価指標ごとの得点の相関の分布が図4である。学生の評価の付け方とその学生を評価した指導者の評価の付け方がどれだけ似通っていたかをこの分布図で確認できる。施設指導者と学生の評価に正の相関がある(ここでは相関係数が 0.4 より大とする) のが、日本人学生 5 名 38%、留学生 2 名 10%であった。相関がない(ここでは-0.2 以上かつ 0.2 未満とする) のが、日本人学生 3 名 23%、留学生 12 名 63%であった。日本人学生の約 4 割が指導者の評価と相関があり、留学生は 1 割にとどまっている一方で、相関がない学生が日本人で 2 割、留学生で 6 割である。

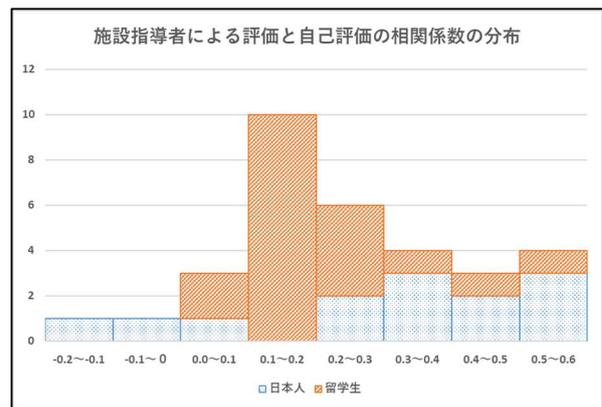


図4 実習 I の評価平均

これまで調査した2回の実習と比較したのが表2である。相関がある学生の割合が日本人学生、留学

生ともに以前の調査に比べ少ない。また相関がない学生が日本人学生は、過去2回は0名であったが、今回は3名23%であった。また、留学生もこれまで以上に多い。これは、実習で求められる評価指標及びそれに対する評価基準についての理解が低いことから生じていると考える。今回は他の2回と比べ相関がある割合が減り、相関がない割合が増えた。他の2回の実習に比べると、介護実習Ⅰは、入学して介護福祉の専門を学び始めて4か月後に実習ということでもまだまだ学習が少なく、さらには初めての現場での実習である。介護技術の理解や技術がまだまだであり、学生にはどの程度のものが求められているのかもわからない状況であったであろう。さらには、挨拶をはじめとする対人コミュニケーションなどの社会で必要な汎用力が未熟な時期である。その結果がここに現れているのではないだろうか。

表2 調査した実習の相関の推移

実習時期		2018.9	2019.3	2019.8
実習種別 (入学年度)		実習Ⅲ (2017年度生)	実習Ⅱ (2018年度生)	実習Ⅰ (2019年度生)
相関がある (0.4より大)	日本人学生	75%(6/8名)	67%(6/9名)	38%(5/13名)
	留学生	20%(2/10名)	29%(2/7名)	10%(2/19名)
相関がない (0.2以下)	日本人学生	0%(0/9名)	0%(0/9名)	23%(3/13名)
	留学生	50%(5/10名)	28%(2/7名)	63%(12/19名)

3. 2 学生の実習評価の状況

(1) 領域別の評価の状況

施設指導者による評価及び自己評価の各評価指標ごとに平均した結果を領域ごとに集計したのが表3である。全5領域の中で、指導者による評価も学生による評価も「実習態度」の評価が一番高い。これは、従来の評価結果とも一致している。

一方一番低い評価領域は、指導者による評価は「コミュニケーション」であり、学生の自己評価は「施設理解」であった。「施設理解」は指導者による評価も「コミュニケーション」に次いで低い。

表3 領域別の評価平均

領域	指導者評価		自己評価	
	日本人学生	留学生	日本人学生	留学生
実習態度	4.35	4.53	4.24	4.11
自己目標	3.88	4.11	3.92	3.88
コミュニケーション	3.29	3.39	3.64	3.65
介護活動	3.66	3.84	3.78	3.77
施設理解	3.44	3.51	3.42	3.57

(2) 実習態度における評価の状況

評価の高かった「実習態度」の領域であるが、表4によれば、「実習態度」内の5つの評価項目のうち、「礼儀」「健康管理」の評価結果が高い。この傾向は、今まで調査した結果とほぼ同じ傾向である。指導者による評価では、日本人学生は「礼儀」が一番高く、留学生は、「健康管理」が高かった。「健康管理」は指導者による評価の方が高い。一方、評価の高い「実習態度」の中で、学生も指導者も同じように低い評価が「積極性」である。これも、今までの調査と同じ結果である。

表4 「実習態度」の評価項目の評価平均

実習態度の評価項目	指導者評価		自己評価	
	日本人学生	留学生	日本人学生	留学生
積極性	3.62	3.95	3.56	3.79
協調性	4.18	4.47	4.20	4.08
守秘義務	4.46	4.53	4.12	4.03
礼儀	4.80	4.72	4.85	4.38
健康管理	4.69	4.97	4.16	4.26

(3) 積極性における評価の状況

さらに、「積極性」内の評価指標における評価平均を示したのが表5である。介護実習1で新たに追加した指標である「利用者や職員の名前を覚える」について、日本人学生は、全体的に評価が低い「積極性」の中では高めの評価であり、自己評価も若干高い。興味深いのが、「実習中の学習課題に気づき、改善に努める」で、日本人学生に対しては、指導者による評価は3.31と低く、留学生は4.11と高い評価で開きがあった。自己評価の得点は日本人学生と留学生の間に特段の差はないが、留学生の自己評価に比べ指導者が高得点をつけている。留学生は自己評価では、「わからないことを聞き、聞いた上で問題を解決し、行動に移す」が高い評価であったが指導者評価はそれほどでもない。留学生はわからないことを積極的に聞き行動する姿勢があり、観察していた指導者らには改善姿勢があるように見えたのであろうか。そのような行動力が日本人学生には少ないのかもしれない。

表5 「積極性」の評価指標の評価平均

積極性の評価指標	指導者評価		自己評価	
	日本人学生	留学生	日本人学生	留学生
利用者や職員の名前を覚える	3.92	3.89	3.69	3.74
興味や関心をもって行動する	3.62	3.89	3.46	3.68
わからないことを聞き、聞いた上で問題を解決し、行動に移す	3.62	3.89	3.54	4.32
実習中の学習課題に気づき、改善に努める	3.31	4.11	3.54	3.42

(4) コミュニケーション

5領域の中で評価が低かった「コミュニケーション」の評価を着眼点別にまとめたのが表6である。指導者による評価、学生の自己評価いずれも、利用者とのコミュニケーションよりも職員とのコミュニケーションに課題があることがわかる。前回調査でもこのような傾向があった。自己評価が低いことから学生自身も多くは自覚しているものと思われるが、指導者からの評価はさらに厳しい。

表6 コミュニケーションの評価の着眼点別評価平均

コミュニケーション 評価の着眼点	指導者評価		自己評価	
	日本人学生	留学生	日本人学生	留学生
利用者との意思疎通が図れる	3.58	3.79	3.83	3.84
職員との意思疎通が図れる	3.00	3.00	3.46	3.46

(5) 介護活動の評価項目

「介護活動」は、評価項目、評価指標が多い評価領域であり、介護実習Iにおいても、6評価項目、21評価指標存在する。表7に「介護活動」の評価項目について評価平均点をまとめた。その中で、「受持ち利用者理解」の指導者による評価が特に低かった。自己評価も「記録」の次に低い。「生活支援技術」や「福祉用具の適切な理解」は施設指導者による評価は、日本人学生、留学生ともに高い。学生の自己評価では、日本人学生、留学生ともに「記録」が一番低い評価となった。指導者評価も「記録」は低い方であるが、「受持ち利用者理解」の方がさらに低い。「観察」は、学生の自己評価は高いが、指導者による学生の評価は日本人学生が低かった。

表7 介護活動の評価項目の評価平均

介護活動の評価項目	指導者評価		自己評価	
	日本人学生	留学生	日本人学生	留学生
受持ち利用者理解	3.12	3.41	3.43	3.60
生活支援技術	4.00	4.18	3.95	3.77
福祉用具の適切な使用	3.85	4.00	4.08	3.95
観察	3.65	4.04	3.92	3.97
記録	3.57	3.59	3.38	3.56
報告	3.84	3.79	3.92	3.79

(6) 生活支援技術の評価指標

「生活支援技術」の評価指標の評価平均を表8に示す。「介護活動」の評価項目の中で指導者からの

評価が高い「生活支援技術」であるが、その中でも「利用者のニーズに合ったレクリエーションができる」の評価が高い。日本人学生は、自己評価も高く、レクリエーションの企画実践には自信を持っているようである。一方で、留学生は、レクリエーション企画については自己評価が低い。これは指導者による評価は高い。これは留学生が出身地の歌や踊りなどの披露もあるため指導者からの評価が高くなっているのかもしれない。「利用者の安全で快適な生活環境を整える必要性が理解でき、実践できる」の日本人学生の自己評価が若干低い。

(7) 受持ち利用者理解の評価指標

「受持ち利用者理解」の結果(表9)を見ると、日本人学生に対する指導者の評価は、「利用者の障害や疾病を把握して、利用者の望みが理解できる」「利用者がどのような気持ちで生活しているか知った上で関わっている」の両評価指標が低く、「利用者の基本的な介護ニーズを知ることができる」という評価の着眼点の評価が低い。着眼点の「利用者の生活が理解できる」では、日本人学生、留学生ともに、「利用者の生活歴や家族状況、人間関係など理解できる」の指導者による評価は低い。「利用者の一日の生活を理解できる」の指導者による評価は日本人学生の評価が低く、留学生の評価が高くなっている。自己評価では、「利用者の一日の生活を理解する」は日本人学生、留学生ともに高くなっている。そのため、指導者と日本人の評価に開きが見られ、日本人学生には課題項目の一つである。留学生は、「利用者の生活歴や家族状況、人間関係などが理解できる」の自己評価が低く、日本人学生は、「利用者の年齢、性別、障害の種別・程度などから利用者の特徴を理解している。」が低い。利用者についての理解が浅い状況が見られる。

(8) 介護活動の観察・記録・報告

「活動記録」の中で、「観察」「記録」「報告」について評価指標の評価平均をまとめてみた(表10)。学生が「誤字、脱字や訂正印が無く、丁寧に書かれている」を低く自己評価しているのに対し、指導者の評価は悪くはなく、むしろ日本人学生については評価が高い。日本人学生はさらに「介護場面の的確に表現する」の自己評価が低く、「報告は適切な時間にメモを活用し、5W1Hを明確にした内容である」も低い。文章にしる口頭にしろ、事象を漏らさず理解できる表現で伝えることが苦手な状況が

表8 生活支援技術の評価指標の評価平均

評価着眼点	生活支援技術の評価指標	指導者評価		自己評価	
		日本人学生	留学生	日本人学生	留学生
個別性に応じた介助の必要性を理解して実施できる	利用者の安全で快適な生活環境を整える必要性が理解でき、実施できる	3.77	3.89	3.38	3.74
	指導者の指導のもとで介護技術を安全・安楽に実施できる	3.62	3.89	3.62	3.89
	個別性に応じた着脱・整容の介助を安全・安楽に行うことができる	3.69	4.00	3.77	3.47
利用者のニーズに合ったレクリエーションの企画と実施ができる	レクリエーション企画を立て、実施できる	4.31	4.42	4.31	3.84

表9 受け持ち利用者理解の評価指標の評価平均

評価着眼点	受け持ち利用者理解の評価指標	指導者評価		自己評価	
		日本人学生	留学生	日本人学生	留学生
利用者の生活が理解できる	利用者の1日の生活を理解する	3.31	3.84	3.92	3.95
	利用者の年齢、性別、障害の種別・程度などから利用者の特徴を理解している	3.23	3.58	3.23	3.89
	利用者の生活歴や家族状況、人間関係など理解できる	3.08	3.11	3.31	3.21
	利用者のADL(日常生活動作)など生活能力や作業能力を理解している	3.31	3.58	3.31	3.53
利用者の基本的な介護ニーズを知ることができる	利用者の障害や疾病を把握して、利用者の望みが理解できる	2.92	3.26	3.38	3.56
	利用者がどのような気持ちで生活しているか知った上で関わっている	3.08	3.32	3.46	3.56

見て取れる。一方で、日本人学生は、「実践した内容と結果は必ず職員に報告している」「利用者の変化が見られたらすぐに職員に報告する」といった大事な報告をするという点で、自己評価だけでなく指導者からも高評価を得ている。留学生は、「観察」の自己評価が高く指導者からの評価も高い。しかしながら、日本人学生は、「職員の介護場面を観察し、実践に移せる」が低く、絶対的学習の機会を逃している様子が伺える。

(9) 施設理解

評価項目が2つ、評価指標の数も5つしかない小さな領域「施設理解」が5領域全体の中で一番低い自己評価であり、指導者からの評価も低めの領域である。この領域の評価項目の評価平均を表11に示す。日本人学生の「施設の理解」の自己評価が低かった。この評価指標は、指導者からも評価がしにくいと指摘されており、「施設が地域で果たす役割や機能を実習日誌や訪問前記録等に詳しく表現できている」というように観察が可能な表現に変更したものである。ところが、後述する実習反省会でも、地域で果たす役割についてのとらえ方が施設間や本学とで異なる点があり、再度検討すべき評価項目である。

表10 観察・記録・報告の評価指標の評価平均

評価項目	観察・記録・報告の評価指標	指導者評価		自己評価	
		日本人学生	留学生	日本人学生	留学生
観察	利用者の反応を待ってから適切な介護ができる	3.77	4.13	4.15	3.94
	職員の介護場面を観察し、実践に移せる	3.54	3.95	3.69	4.00
記録	介護場面を的確に表現できる	3.46	3.53	3.15	3.47
	目標に沿った記録ができる	3.38	3.58	3.92	3.84
	根拠に基づいた記録ができる	3.54	3.32	3.23	3.42
	実習記録に自分の考えを適切に記録できる	3.85	3.68	3.54	3.78
報告	誤字、脱字や訂正印が無く、丁寧に書かれている	3.92	3.74	3.08	3.28
	報告は適切な時間にメモを活用し、5W1Hを明確にした内容である	3.08	3.53	3.31	3.68
	実践した内容と結果は必ず職員に報告している	4.00	3.68	3.92	3.79
	利用者の変化が見られたらすぐに職員に報告する	4.08	4.31	4.54	3.89

表11 施設理解の評価項目の評価平均

施設理解の評価項目	指導者評価		自己評価	
	日本人学生	留学生	日本人学生	留学生
施設の理解	3.54	3.37	3.08	3.47
職種の理解	3.35	3.66	3.77	3.66

4. 実習反省会での実習先からの意見

2019年10月31日に高田短期大学にて介護実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの実習反省会を実施した。グループホーム、デイサービス、特別養護老人ホーム、介護老人保健施設計9施設から実習指導者や施設長が参加した。この中で、実習前の学生の状況や実習指導の内容、ルーブリックの説明などを行い、施設側と学校側とでルーブリック評価について意見交換をした。その後、各施設での状況等について報告をいただき自由に意見交換をした。多くの意見の中から、ルーブリックや評価活動に関わるものを選んで表12にまとめた。

ルーブリックの導入については概ね高評価を得た。ただ、介護実習Ⅰでは実習先が多様であり、実習先によっては実施しない内容が評価指標に含まれており、改善すべき事項を指摘していただいた。また「施設理解」では、評価の視点をどうするか課題が残った。実習でルーブリックを活用することに前向きな発言がある一方で、たくさんの指標があるルーブリックを実習前に読み込んでおく必要があり、なかなか難しい発言もあった。学生の弱みや成長させたい点をルーブリックの評価項目で表現した発言があり、ルーブリックによって介護福祉士として求められる様々な能力を共通の言葉で意見交換すること

ができた。

表12 施設指導者からの意見

=====

【ルーブリック導入の高評価】

- ・ルーブリックによって非常に実習を評価しやすくなった。これまでは過去の受け入れ学生と比較するような評価となっていたので、客観的基準を示していただけて良かった。
- ・施設側も教え方の工夫ができるようになってきた。

【ルーブリックの評価項目の改善課題】

- ・ルーブリック評価の項目で評価できないものがある。当施設はデイサービスであり機能訓練がメインとなる。利用者理解などの項目は機会がなく評価できないので今後の改善に期待する。
- ・施設理解についての評価は難しいので評価指標の改善を期待する。
- ・学生が掲げる目標と、施設のカテゴリー部分でミスマッチがあった。

【実習でのルーブリックの活用と課題】

- ・ルーブリック評価分析結果について施設現場でも紹介したい。内容的には評価ギャップについて気になるところである。
- ・カンファレンス等で評価基準の話をしなきゃいけないか検討を要する。
- ・ルーブリックの内容を評価前に精査していなかった。
- ・ルーブリック評価まで細かく精査できなかった。

【実習生の課題】

- ・留学生は記録ができないと感じた。
- ・実習生は、次はより高いレベルを求められると意識して欲しい。
- ・施設が施設利用者やその家族に求められているものは接遇力であり、それも「コミュニケーション能力」に含まれる。

【実習指導の課題】

- ・施設は現場の維持で精いっぱいな状況で、中には学生より学力的に劣る職員も存在し指導にあたっている。不信感だけでなく、そのような状況も介護現場の現実として受け止めて欲しい。

5. 考察

5. 1 ルーブリック評価分析から得られた学生の課題

(1) 利用者の理解

「受持ち利用者理解」の指導者による評価が低い。特に、「利用者の生活歴や家族状況、人間関係など理解できる」「利用者の基本的な介護ニーズを知る」などが低い評価であった。日本人学生は「利用者の一日の生活を理解する」が高めの自己評価に対し、指導者の評価は低かった。また、「積極性」の「実習中の学習態度に気づき、改善に努める」は、留学生は指導者から高い評価を得たが、日本人学生は低い評価であった。実習中の気づきが留学生よりも低い状況が見られた。この点は、利用者のどのような点に気づけばよいのか多くの事例を示すなどして事前の気づきと行動について指導する必要がある。

(2) コミュニケーション力

「コミュニケーション」は、指導者からの評価が最も低く、自己評価も2番目に低かった。特に職員に対するコミュニケーションの評価が低かった。これは、「積極性」の評価が低いことにも関連していると考えられる。学生の実習に臨む態度として、積極的に職員に質問をしていくよう促す必要がある。

一般的に、コミュニケーションや積極性というのは、社会生活を営む上で求められる汎用力ともいえる。この部分は様々な経験値からあがっていくものと思われ、初回は低いのは当然と思われるが、前回

までの介護実習Ⅱ、Ⅲの結果も同じ傾向にあった。日本人も留学生も同様であり、本学の教育で力点を置くべきところが、このコミュニケーション力と積極性であろう。

コミュニケーション力には、自分の意見や考えを相手に伝える表現力も含まれる。その表現力の面でも学生が苦勞していることが、「記録」や「報告」での日本人学生の自己評価の低さからうかがえる。日本語表現に関する科目が設置されているが、履修できる科目を増やすことはなかなか難しいと考えられるため、専門科目を含む様々な授業科目において、学生が自分の意見や考えを口頭あるいは文章で表現しなければならない課題や機会を増やすことが必要であろう。

(3) 施設理解

施設理解の評価が自己評価も施設指導者による評価も低い。施設の種類による役割の違いを徹底して指導することとはもちろん、実習先の施設について個別に調べさせて理解させる機会を与える必要がある。

(4) 自己評価を低くする留学生の増加

これまでの調査（実習Ⅲ2018.9、実習Ⅱ2019.2-3）とは、対象学生、対象実習が異なっているので単純に比較はできないが、2回ともに留学生の自己評価が高い傾向にあったが、今回は留学生と日本人学生の平均値には差はなかった。その原因は自己評価が高い留学生がいる一方で、自己評価が低い留学生の存在である。まだ習い始めて、日本語に自信がない学生の自己評価が低い可能性がある。早い段階での日本語力の向上を目指す指導体制の強化やカリキュラム上の工夫が必要であろう。

(5) 学生の評価力

日本人学生も留学生も以前の介護実習Ⅱ、Ⅲの調査に比べ施設指導者の評価との相関が低い傾向にあった。初めての实習体験であること、専門の学習を始めたばかりであることが原因と考える。まだ技術、知識が身につけていないこと、実際の現場で学んだことを実践する初めての機会であったことから、どれくらいのレベルが求められているかがわからなかったのではないと思われる。介護実習Ⅰでは、まだまだ学生の評価力がないと考えられるため、指導者の評価と自分の評価の差について考えさせる振り返りの機会が必要なのではないかと考えられる。

5.2 今後の研究について

(1) 実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの変化の詳細な調査

今回は速報であり、これまでの介護実習Ⅱ、Ⅲの結果と詳細なところで比較をしていない部分があり、詳細な比較分析が必要である。また、介護実習Ⅱ、Ⅲと比較して、介護実習Ⅰの評価力が低い結果となった。同じ対象の学生たちが今後介護実習Ⅱ、Ⅲと進みながら成長し、評価力も高まっていくことを想像している。今回の介護実習Ⅰの評価を体験した学生が今後どのように変化していくかを追っていきたい。

(2) ルーブリックのさらなる改善

実習指導者からの指摘を考慮しルーブリックの改善を進める。その上で、介護実習Ⅲにおいて、介護福祉士としてのレベルを目標とする基準を記載する必要性について課題として本研究会にて議論してお

り、その改善に努めていきたい。

(3) 評価のフィードバック

ルーブリックによる評価の集計結果から分析を進めているが、これらの結果のどの部分をどのタイミングでどうフィードバックしていくか、カリキュラム、授業での事前指導、実習や実習カンファレンス、評価のPDCAサイクルの構築を検討していきたい。

本研究は、JSPS 科研費 JP19K02261 の助成を受けたものである。

参考文献

- ・厚生労働省社会・援護局長(2018) 「社会福祉士学校及び介護福祉士学校の設置及び運営に係る指針について」改正後全文.
- ・福田洋子、野呂健一、寶來敬章、鷺尾敦(2019)、「介護実習でのルーブリック評価の導入による効果と課題」、『高田短期大学キャリア研究センター紀要・年報』第5号、pp.28-39.
- ・福田洋子、野呂健一、寶來敬章、鷺尾敦(2018)「介護実習におけるルーブリック評価導入に向けての課題—次週施設へのアンケート調査から—」『高田短期大学キャリア研究センター紀要・年報』第4号、pp.35-46.
- ・鷺尾敦、福田洋子、野呂健一、寶來敬章(2020)、「介護実習ルーブリック評価結果を用いた学生の実習分析」、『高田短期大学紀要』第38号、pp.23-34.
- ・柗崎京子、松永 美輝恵、宮本佳子、楠永敏恵。吉賀成子(2018)「介護実習の実習目標達成を支援するための取り組みと課題：「実習課題ルーブリック」の作成と活用結果から」『介護福祉学』25巻1号、pp.1-10.
- ・松下佳代(2012)「パフォーマンス評価による学習の質の評価—学習評価の構図の分析にもとづいて—」『京都大学高等教育研究』18巻、p.75-114.
- ・三木知子(2018)「ルーブリックによる教育・保育実習自己評価スタンダードの提案」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』12巻1号、pp.1-10.
- ・宮本佳子、楠永敏恵、吉賀成子、柗崎京子(2017)「初学習段階における「介護実習記録」を課題とするルーブリック評価の施策と活用」『帝京科学大学紀要』Vol.13、pp.77-86.
- ・岡山加奈、荻あや子、高林範子、山口三重子、萩野哲也(2014)「既存の基礎看護学実習評価表の課題とルーブリックを用いた評価表の提案」『岡山県立大学保健福祉学部紀要』第21巻1号、pp.9-16.
- ・Stevens, Dannelle D. and Levi, Antonia J.,(2013), *Introducing to Rubric: An Assessment Tool to Save Grading Times, Convey Effective Feedback, and Promote Students Learning*. Stylus Publishing (=佐藤浩章監訳、井上敏憲、保野秀典訳(2016)『大学教員のためのルーブリック評価入門』玉川大学出版部).